

J. S. ミル『経済学原理』における 人生哲学と企業教育論

前 原 正 美

はじめに

本稿の目的は、J. S. ミルの『経済学原理』を主軸としつつ、人間における幸福とは何か、人は一体、何のために生きるのか、という人生の目的＝人間の使命について考察することにある⁽¹⁾。

ミルによれば人生には目的がある。人生の目的とは、自己実現＝人間的完成を目指し、自己向上を遂げてゆくことにある。

「人間の〔人生における〕目的は、……自分自身のあらゆる能力を、完全で矛盾ない全体へと、最高度に、そして最も調和的に発展させてゆくことにある⁽²⁾」。

ミルによれば、人生の目的とは自己と他者との比較ではなく、自分自身を自己完成＝人間的完成にむけて、より高度に鍛えあげ、高めてゆくことなのである。ミルが声を大にして主張したいことは、世間（他者）をありのままに受け入れられる共感能力を養いなさい、ということなのである。人間はお互いにお互いを受け入れ、認めあつてこそ、自らの個性＝自己能力を発揮し、存在価値を高めて、社会に貢献してゆける。

一言でいえばミルは、人間は他者を受け入れるためにこそ世に登場してきた、と主張しているのである。

ミルによれば世に偶然はなく、すべては必然である。何事にせよ人間は、すべてをありのままに受け入れて、人間的に——知的・道徳的に——に成長し、年を重ねるごとに、そして経験を重ねるごとに、ひとつずつ、そして少しずつでも眼の前に生じる事象や事実や他者を受け入れ、人間的器量を大きくし、より大きな人間へと成長してゆかなければならないのである。

要するにミルは、人の生きる意味は人間愛をより深く培うことにある、と主張するのであ

り、すべての事実や経験は愛の発見とその認識のためにこそ与えられている、ということを入間的成長のプロセスによって理論的、論理的に論証しているのである。

それゆえ人間は、人を愛し、人に愛されることを心がけて生きてゆかなければならない。

ミルによれば「愛」とは「受け入れる」という意味である。何事にせよ「受け入れる」器量の大きい者は、大きな愛の持ち主であり、深く愛を培った者といえるであろう⁽³⁾。

もとより人間は、調和をこそ目指さなければならない。

調和とは、ひとつには自分自身の内なる調和であり、いまひとつには社会の調和である。

そして社会が調和するためには、その前提として人間一人ひとりが自分自身を調和させなければならないのである。

調和とは「愛」である。そして「愛」とは「受け入れる」という意味である⁽⁴⁾。

それゆえ人間一人ひとりが互いに互いを受け入れ、認めあってこそ、社会愛が生まれ、そして「一人は万民のために万民は一人のため尽くしあう」、という公共心の体系が形成されるのである。

社会が調和に満ちた状態、すなわち社会が人間愛によって信頼しあえる状態に到達しうるには、人間一人ひとりが自らの愛を発見する以外に道はありえない。そのためには——人間が愛そのものとなるためには——自らの感動を発見する以外にはない、とミルは主張したのである。

人間の感動とは何か。それは、ひとえに自己と他者との一体感である。他者のなかに自己の「完全なる一体感」＝「完全なる共感」を見いだした時、人は自らの心に眠る感動を発見しえたのであり、自分自身を発見しえたのである。

その時こそ、人は愛のために自らの人生を捧げて生きてゆける。なぜなら世に感動を伝えることに自らの使命を発見しえた時、すでに人は社会のために身を尽くして喜びを与えたい、という境地に達しているからである。

そのためにはミルは教育の社会的使命が重要である、と主張した。

「教育と世論が人間の性格に対してもつ絶大な力を利用して、各個人に、自分の幸福と社会全体の善とは切っても切れない関係があると思わせるようにし、とくに、社会全体の幸福を願うならば当然行なうべきだと思われる行動様式——さし控えたり、積極的に行なったり、という——を実行することが、自分の幸福と切りはなせない関係にあることを教えるべきである⁽⁵⁾。」

他者と異なる自分を発見し、そして自らのアイデンティティー、独自性を見いだしてこそ、

人間は自らの幸福を発見し、人の成しえぬ仕事をして世に感動を与え、ひいては自らの仕事を通じて愛を施す生き方をなし、他者を受け入れて他者と協調して自らの使命を果たしてゆけるのである。

もとより人間とは、個性＝自己能力、ひいては自分本来の個性＝潜在的自己能力であり才能である。ゆえにそれを見出した時、人は自らの感動の心を見出し、この世に生まれおちた至上の喜びを見出さるのである。

人間の幸福とは何か、人の生きる意味はどこにあるのか、人は何のために生きるのか、という人間の根本的問題を教示し、社会に啓蒙を与えてゆくことが政治経済学の使命である、とミルは強く信じたのである。

I 人生の目的と感動の発見

ミルは、人は一体、何のために生きるのか、という人間の本質的問題を考えることが最も重要な問題である、と主張する。

ミルの考えでは、人生には目的がある。人生の目的とは、自己実現＝人間的完成にある。自己実現＝人間的完成とは、自分自身を人間的に完成せしめること、つまり現実の自分を理想的状态に到達せしめることにある、といえるだろう。

かかる意味での人生の目的を認識し自覚するには、何よりも自己の発見が不可欠となる。自己の発見とは、自分本来の個性＝潜在的自己能力の発見であり、つまりは感動の心の発見に他ならない。そもそも感動とは、これさえあれば他にはもう何もいらぬ、という人間の自然的感情からおのずと湧きあがる至上の喜びの感情である⁽⁶⁾。

〔1〕 したがって自分の人生に感動を見出した人間は、まず第一に、生きる喜びを見出し、生命を与えられたこと自体に感謝する心が生まれるであろう。また感動の心の発見は、生きるに足る価値の発見であり、自分個人に特有な創造的価値の発見である。

自分の心の奥底で眠っていた感動を呼び覚まし掘り起こした人間は、たとえ自分がそれまで物的利益の増大や地位・名誉の増大に幸福の価値規準を見いだしていたにせよ、もはや目先の利益に惑わされず、自らの心に映じた感動をひとつの形として自己表現することに幸福の価値規準を見いだすようになる。

したがって感動の心の発見は、それまでの幸福の価値観を転換せしめる。感動の心を見出した者は、幸福の絶対的価値を見出した者である。

幸福の絶対的価値とは、一言でいえば「愛」である。「愛」とは、ひとつには「受け入れる」ことであるが、いまひとつには「愛」とは「無償」ということである。愛の認識に到達

しえた者は、眼の前に現れたすべての人物や事実を受け入れ、そして自らの喜びを、感動を無償に分け与えてゆくのである。

感動とは、ひとえに自己と他者との「完全なる一体感」であるが、まさにそれは別言すれば、愛に他ならないのである。「完全なる一体感」とは、他者のすべてを受け入れることに他ならず、かつまた無限の愛の喜びに他ならないからである。

たとえばある特定の他者に感動した者は、その他者に「完全なる一体感⁽⁷⁾」＝「完全なる共感⁽⁸⁾」を見いだした者であり、それゆえにその他者のすべてをありのままに受け、かつまたその他者のなかに自己の無限の喜びを発見しえた者であるがゆえに、どこまでもその喜びを世に広く伝えてゆくために自らを厳しく鍛えあげ自らを高めてゆくのである。いいかえれば感動を発見しえた者は、至上の喜び——自己と他者との「完全なる一体感」——を発見したがゆえに、幸福の絶対的価値＝愛を発見した者に他ならない。なぜなら人の人生における至上の喜び＝最高の喜びとは、自己と他者との「完全なる一体感」＝「完全なる共感」であり、それこそまさに愛に他ならず、人はその愛を発見したがゆえに感動するからである。

ゆえに感動の心を発見しえた者は自らの心に眠る無限の愛の心を発見しえた者であり、それゆえに幸福の絶対的価値を発見した者なのである。

したがって感動の心を発見しえた者は、自らの無限の愛の心を発見しえたがゆえに、幸福の相対的価値から幸福の絶対的価値への幸福の価値転換を図るのである。その転換は、いいかえれば人生の目標から人生の目的への価値転換である。つまり人は、感動の心を発見し、自らの使命を発見するや、自己と他者との相対的比較によって自らの優位性を追求する幸福の相対的価値を規準とした生き方から、現実の自分と究極の理想的自分との絶対的比較によって自らの自己完成＝人間的完成を追求する幸福の絶対的価値を規準とした生き方へと方向転換を図ることになるのである。そしてそのゆえに人生は一変する。

「一体感が完全なら、自分にとってどれほど有利な条件でも、他人の利益にならないものは、たれも考えたり望んだりしなくなるだろう⁽⁹⁾」。

人生の目標にむかって利己心を発揮している時、人は幸福の相対的価値規準に従って生きている。

幸福の相対的価値とは、他者に比しての自己の優位を指し示す価値であり、たとえばそれは地位や権力やお金などによって示される。

たとえひとつの人生の目標を達成したにせよ、人がさらに高い目標を設定して利己心を発揮してゆくのは、幸福の相対的価値に人生の価値を見定め、他者と比較して自分を優位にも

ち込みたい、という心の表れに他ならない。そしてそのかぎり人は、真の幸福にはなりえないのである。

真の幸福は、幸福の相対的価値から幸福の絶対的価値への転換によってこそ得られるのであり、そのためには共感能力の向上によって「完全なる一体感」＝「完全なる共感」を抱ける究極の理想的他者＝愛なる人を発見し感動の心を発見しなければならないのである。

たれしも人は、苦しむためにではなく、喜びをもって生きるために世に登場してきたのである。その人間本来の自然的状態に到達するには、感動の心の発見こそが大切なのである。

〔2〕 第二に、感動の心の発見は公共心を育成する、という点で重要である。感動の心を発見しえた人間は、その感動を世に伝えたい、と考えるようになる。そこにはすでに、自分の喜びを他者と分かちあいたい、社会的利益のために自己能力を役立てたい、という自分が存在する。まさしくそれは、他者と自己とを同一視し、自分個人の幸福だけではなく、社会全体の幸福を願う公共精神＝公共心を培った証に他ならない。

「功利主義の基準は、行為者自身の最大幸福ではなく、幸福の総計の最大量なのである。したがって、高貴な人は、……その人の高貴さが他人の幸福を増し、世間一般がそれからはかり知れぬ恩恵を受けていることは疑いない⁽¹⁰⁾」。

〔3〕 したがって第三に、感動の心の発見は人間愛を育む前提となる。

ミルは人間を善なる存在とみなし、「人間には、他人の善のためになれば自己の善でも犠牲にする力がある」と主張した。そのゆえにミルは、「おのれの欲するところを人に施し、おのれのごとく隣人を愛せよ」という「イエスの黄金律」のなかに「功利主義倫理の完全なる精神⁽¹¹⁾」を読みとり、功利主義哲学の理想を人間愛に見定めた。

しかるに感動の心を発見しえた人間は、公共心を培い、社会的に貢献しうる人間へと成長するが、その他者に尽くしたいという心こそが、やがて家族愛、隣人愛、社会愛、人類愛へと発展する精神的・道徳的源となるのである。

もとよりミルは、究極の理想的社会をゾルレンとしての停止状態と規定し、それを「人間愛と利害を度外視した献身とに満ちた社会」(Ⅲ p.760, ④116頁)と位置づけた⁽¹²⁾が、そうした人間愛に満ちた社会を実現するには、一人でも多くの人間が感動の心を発見し、公共心を培うことが前提となる、と考えたのである。

〔4〕 第四に、感動の心の発見は、自分本来の個性を開花せしめ、潜在的自己能力を最高度

に発展せしめる，という点で極めて重要である。

ミルの考えでは，人間一人ひとは，人間であるという点では同質の個人であるが，しかしそれぞれの人間が自分だけに特有な自分本来の個性＝潜在的自己能力，つまりは才能を有するという点で異質の個人である。

感動の心の発見とは，具体的には，自分本来の個性＝潜在的自己能力の発見に他ならない。たれしも人は，それまで自分が気づかなかった自分本来の個性＝潜在的自己能力を発見すれば，自分自身の能力の偉大さに驚き，感動するのである。

それゆえ自分本来の個性＝潜在的自己能力を発見し，したがってまた感動の心を発見しえた人間は，心の奥底から生命力がみなぎり，自分でも信じられぬほどの才能の開花＝潜在的自己能力の発展を実現しうるのである。

天才とは，天に与えられた才能＝潜在的自己能力を発見しえた人間のことを意味するが，それゆえにその偉大なる自己能力を発見しえた人間は，たれであれ天才になりうるものであり，世に感動を与えられる仕事を成すことができるのである。いいかえれば人は，たれであれ自分にしか成しえない創造的価値をつくりだすことができるのである。

「独創性が人間社会における価値ある要素であることは，たれもが否定しないであろう。新しい真理を発見し，かつて真理であったものがもはや真理でなくなるときに，これを指摘するのみならず，新しい習慣をはじめ，人間生活におけるいっそうの啓発された行為と，人生におけるより洗練された趣味と感覚の模範をたれる人々が，つねに存在しなければならない。……たしかに，天才はきわめて少数派であり，またつねに少数派になりがちである。しかし天才を生むためには，天才の育つ土壌を保存することが必要である⁽¹³⁾」。

〔5〕 第五に，感動の心を発見しえた人間は，人生の目的を自己実現＝人間的完成に見定め，その目的にむかって潜在的自己能力の最高度の開花・発展を目指すようになる。

そもそも人間の使命とは，自分に与えられた生命を明確な自己意識をもって社会的利益のために使用し尽くしてゆく，ということ以外にはない。

ミルの考えでは，人間の生命とは，ひとえに自分本来の個性＝潜在的自己能力に還元して理解しうる。したがって表現を変えれば，人間の使命とは，自分に与えられた本来の個性＝潜在的自己能力を発見し，その偉大なる能力を他者や社会のために使用し，それによって世に感動を与える，ということにある。

裏を返せば感動の心を発見しえた人間は，その感動を世に伝えるという使命を明確に認

識・自覚し、その使命達成のために自らの人生を形づくるようになる。要するに自分の感動をひとつの形として結実させるために、自分本来の個性＝潜在的自己能力を蘇^{よみがえ}らせてゆくのである。そしてそのことこそが、自分自身を自己実現＝人間的完成へと導いてゆくのである。人間は、自分の仕事に生命を賭けてこそ、飛躍的に精神＝意識が高まり、著しい人間的成長を遂げてゆくからである。

「その完成と美化のために正当に用いられる人間のさまざまな制作品の中で、最も重要なものは、疑いもなく人間自身である⁽⁴⁾」。

他方ではこのことは、つぎのようにも説明できる。

感動の心の発見とは、自分の心に潜む理想的人間像を他者に対する「完全なる一体感」＝「完全なる共感」によって発見する、ということである。いいかえればそれは、自分自身が完成なる心の一体感を覚える他者、つまり自分が一心同体となりうる他者のなかに自己の完成した姿を発見する、ということである。その意味で自己は常に他者のなかにある。

〔6〕 第六に、したがって人間は、感動の心を発見しえてこそ、現実の未成熟で不完全な自分をその理想的な人間に近づける最大の自己努力を払い、自己実現＝人間的完成を人生の目的と見定めるようになるのである。

およそ人間は、自分自身が幸福にならなければ、他者の幸福を考えることはできない。

しかるに人間の幸福とは、私的利益の増大にあるのではなく、社会の一般的利益の増大にあるのである。一言でいえば人間の幸福は、愛を実感して生きる、ということのなかにある。まさに人は、愛ゆえに人となるのである。

そして人が人間愛の認識に到達するには、生きるとは一体どういうことか、人生における喜びとは何か、といった人間の本質的問題に立ち返って自分自身を見つめ直すことが何よりも大切なことであろう。

そしてその答えは常に自分自身の心のなかに存在している、ということ、ミルは現代に生きる人びとに教えてくれているのである。

Ⅱ 人生の一般法則と企業教育論

ミルの考えでは、人間一人ひとりが人間の幸福に辿り着くためには、ただ人生の一般法則に従って生きればよい。

人生の一般法則とは、自らの定めた人生の目標にむかって利己心を自由に発揮し、努力し

てゆけば、そのプロセスのなかで自己の個性＝自己能力を高め、知的・道徳的水準を向上せしめ、自然的感情を陶冶し、意識レベル＝共感レベルを高めてゆき、ついには究極の理想的他者のなかに自己の「完全なる一体感」＝「完全なる共感」を見いだし、それによって自らの感動の心を発見し、それまでの幸福の相対的価値規準に従った生き方から幸福の絶対的価値規準に従った生き方へと人生を一変し、自らの仕事を通じて世に感動を伝え、そして愛を振り注ぐ公共心に満ちた人生を貫くようになる、という法則である。

ゆえにこそ人の人生は、人生の目標を自ら設定し、利己心を発揮することから出発しなければならない。

「人類のエネルギーが——かつては戦争における努力に使用されていたが——いまは富を獲得するための努力に使用されているということ、しかもそのような状態が、よりすぐれた精神をもつ人びとが他の人たちを教育してよりよき状態へ移らせることに成功するまで続くということは、人類のエネルギーが鈍りよどむよりも、疑いもなくはるかに結構なことである」(Ⅲ p.754, ④106頁)。

ミル『経済学原理』の偉大さは、人間本性に基礎づけて政治経済学を広大な社会科学体系として集大成した点にある。

ミルの考えでは、人間本性は利己心と公共心とに大別して理解しうる。人間には自分自身の自然的感情からおのずと湧きあがる欲望があるが、ミルは社会的正義の範囲内で是認される欲望を「賢明な利己心」と呼び、その法＝正義を犯す欲望を「偏狭な利己心⁽¹⁵⁾」と呼んだ。通常ミルが「利己心」というばあい、それは「賢明な利己心」のことである。

他方、公共心とは、自分個人の私的利益を考えず、ただ社会的利益のために貢献・奉仕したいと考える人間の心である。

「純粋な私的愛情と公共善への誠実な関心をもつことは、程度の差こそあれ、正しく育った人なら〔知的・道徳的成長を遂げた人なら〕、たれにでもできることである⁽¹⁶⁾」。

「公共精神、あるいはおおらかな感情、あるいは真の正義とが要望されるかぎり、これらの美しい資質を育成する学校となるのは、利害の孤立ではなくして、利害の結合である」(Ⅲ p.769, ④133頁)。

利己心と公共心とは、ともに人間本性である以上、すべての人間が本来、もち合わせてい

るのだが、基本的に人間は、公共心よりも利己心が根強く作用する。それゆえミルは、人間の基本原理に照らし合わせて利己心の体系を構築することが『経済学原理』の急務な課題である、と考えた。

要するにミルは、人間が利己心を自由に発揮するに至れば、自然的感情の涵養に伴って共感感情を豊かに培い、自己の発見＝感動の心の発見に到達し、それを契機として公共心を育成する、と信じたのである。

「人間の感情は、賢明な利己心によって道徳的となり、共感能力によって人を感動させ、自己主張を貫く力をもつようになる⁽¹⁷⁾」。

したがってミルの考えでは、基本的には人間は、人生の目標の設定→利己心の自由な発揮→生活水準の向上→知的・道徳的水準の向上→豊かな自己能力と自然的感情の涵養→共感感情の培養＝共感能力の向上→自分本来の個性の発見＝潜在的自己能力の発見つまりは自己の発見＝感動の心の発見→人生の目的＝自らの使命の発見→公共心の育成→幸福の価値転換→人間愛の認識への到達という経路を辿り、人生の目的が自己実現＝人間的完成にあるという認識に到達しうるのである。

しかるにミルは、こうして公共心を育成しえた人間が少なくとも社会の過半数を超えた割合に達すれば、人間の意識革命を通じて「社会の道徳革命」が起こり、公共心の体系が構築されるであろう、と信じたのである。

「社会の道徳革命とは、労資間の恒常的不和の解消であり、相対立する利害のために闘う階級闘争から万人に共通なる利益の追求における友誼に満ちた競争への人間生活の転形であり、労働の尊厳性の高揚であり、労働者階級における新しい安定感および独立性であり、すべての人間の日々の営みの社会的共感および实际的知性の学校への変型である」(Ⅲ p.792, ④174頁)。

そしてミルは、社会の大多数の割合を占める労働者階級が公共心を培うためには、何よりもまず自分自身の仕事に利害関心をもって、利己心を十分に発揮することが大切である、と考えたのである。

このことは、いかにミルが人間の利己心の作用を重要視していたか、を如実に物語る。

ミルの考えに従えば、人間が利己心をもつことの重要性は、以下のように整理して示しうる。

〔1〕 まず第一に、利己心は人間一人ひとりの人生に目標を与える、という点で重要である。

一般に人間は、自分の努力が自分自身の私的利益の増大と結びつかない制度のなかでは、自己努力への契機それ自体が失われてしまいがちである。しかし反対に、自分自身の自己努力がひとつの成果となつてはね返る制度のなかでは、自分の境遇改善・地位向上を図りたい、という欲望が湧きあがり、人生に対する積極的な心が生まれる。

ミルの考えでは、人生の出発点において最も大切なことは、何かを成し遂げたい、とおもう心をもつことである。このばあい、動機は何でもよい。たとえば金持ちになりたい、立身出世を遂げたい、という動機であれ、それが人生に目標を与えることになれば、人はその目標にむかって利己心を十分に発揮し、最大限の自己努力を払うようになるのである。

要するにミルは、人間が利己心をもつこと自体が、自分自身に対する利害関心を有している証なのだ、と考える。

ミルの考えでは、社会における最大の敵は、人間の自己中心主義であるが、まさしくそれは、人間の自分自身に対する無関心に根本的原因がある。

自分自身に利害関心をもたぬ人間が他者や社会に対して無関心、無感動、無責任な人間となるのは当然のことである。そしてこうした人間こそが、自分さえよければそれでよい、という自己中心主義に陥り、社会的規範を犯し、したがってまた社会秩序を混乱状態に導く元凶となるのである。

「すべての疑わしい問題を自分に有利なように決定する自己中心主義——これらはすべて、道徳的悪であり、不正な、いとうべき道徳的性格を形成する⁽¹⁸⁾」。

表現を変えれば、利己心とは、自己能力を他者や社会に是認されたい、という人間の自然的感情である。

それゆえ利己心を発揮し、自分の欲望を満たしたいと考える人間は、他者や社会の是認＝共感を獲得できない行為は自制する。むしろ逆に自分の欲望を満たすために、社会的是認＝共感を獲得できるように行動し、自己能力を使用する。そうでなければ、私的利益の増大や立身出世は見込めない。

他方ではまたそうした人間は、他者を認めたい、是認＝共感したい、と考える。というのは他者の能力や長所を自分自身のなかに組み入れることは、自己能力の向上につながり、さらには自己の人間的成長に結実するからである。

いずれにせよ利己心をもつことは、社会的法＝社会的正義のなかで、自己能力を自由に使

用し、自分自身の目標あるいは私的利益の増大を実現せしめるばかりか、結果として社会的利益の増大を生みだし、安定した社会秩序の形成に結実するのである。

「公共の利益を助長する最善の方法は、一般の人びと〔労働者階級〕に自分たち自身の利益を完全なる自由をもって追求させることである」(Ⅲ p.717, ④32頁)。

〔2〕 第二に、利己心の自由な発揮は公共心の育成に結実する、という点で重要である。

ミルの考えでは、労働者階級が自分自身に対する利害関心を強め、自分が定めた人生の目標に向かって自由に利己心を発揮してゆけば、生活水準を高め著しい境遇改善・地位向上を果たしてゆくだろう。その一方では、かれらは自分の仕事を通じて個性＝自己能力を訓練・陶冶し、その過程のなかで知的にも道徳的にも成長してゆくだろう。その結果、かれらは人間としての自然的感情を豊かに培い、したがってまた共感能力を豊かに育み、その共感能力を飛躍的に高めてゆくだろう。

共感能力が高まれば、感動の心の発見はそれだけ容易となる。そして人は、その発見によって公共心を培った人間へと成長するのである。ここに人生の目標は、人生の目的へと転化する。その結果、人の生きる意味は、物的利益の増大や地位・名誉の向上にではなく、世に感動を伝えるため自己能力を最高度に高め、自己実現＝人間的完成を目指すことにあり、と認識するに至るのである。

要するにミルは、私欲を捨て無私の心を培うには、まずもって私欲をもたねばならない、と主張するのである。

「自然的感情を最も多くもつ人びとは〔利己心の旺盛な人たちは〕、常にその陶冶された感情が最も強烈な感情となってゆく人びとである。個人的衝動を生き生きと力あふれるものにするのと同じ感受性がまた、徳への最も強烈な愛と、最も厳格な自制力とを生む源泉となるのである⁽¹⁹⁾」。

明らかにミルは、人間は私欲＝利己心を自由に発揮するに至れば、自然的感情＝共感感情を豊かに培い、自己の発見＝感動の心の発見に到達し、それを人生の転機として公共心を育成しうる、と考えたのである。逆にいえば人間一人ひとりが公共心を育成するためには、たれもが自分の利己心を自由に発揮し、それによって他者に対する観察力＝想像力を豊かに育み、共感能力を高めてゆかなければならない。

たとえば自分が他者を観察し、その他者に共感し、感動したとする。その感動は、しかし

実は、自分本来の個性＝潜在的な自己能力の発見に他ならず、つまりは自己の発見を意味するのである。

人生における幸福の価値観は、その自己の発見＝感動の心の発見によって一変する。なぜなら感動の心を発見しえた人間は、もはや目先の私的利益に惑わされず、どこまでも自己を貫いて、自分の心に映じた感動を世に伝えてゆくという使命の達成に、幸福の絶対的価値規準を見定めるようになるからである。

労働者が完全なる自由をもって利己心を發揮しうる生産＝労働体制は、労働者同志の共同組織しか存在しえないのだが、しかしその普及・発展のためには、資本の社会的解放によって労働の社会的解放を促進し、もって利己心の体系＝生産力の体系を構築することが急務となる。その意味でミルの政治経済学は、何よりもアダム・スミスの利己心の体系＝生産力の体系の再構築を目指している、といえよう。ミル『経済学原理』の目的は、公共心の体系の構築にあるが、その実現のためには利己心の体系の構築が前提条件となるのである。

たとえばミルによれば株式会社は、他の資本主義的企業と比較して優位な立場にある。

- (1) その理由は、まず第一に、大資本をもつ株式会社では、分業協業体制や最新の生産技術を誇る機械設備が充実しているため、労働者一人当たりの労働能率は著しく高まり、したがってまた労働者の生活水準は向上する、という点にある。生活水準の向上は、労働者に自分自身に対する利害関心を認識せしめ、労働者の利己心を喚起せしめる、という点で重要である。つまり生活水準向上に伴う利己心の喚起は、自己の境遇改善・地位向上を図ろうという意識を労働者に植えつけてゆく。その意味で株式会社は、労働者に自己改善の余地を与えてゆく。
- (2) 第二の理由は、株式会社は労働者に個性＝自己能力と自然的感情の訓練・陶冶の場を与える、という点にある。

株式会社は大企業であるが、そのため労働者は、さまざまな仕事に従事し、仕事上の多くの経験をなすことができる。

何事にせよ実際にやってみるまでは、それが自分に適切か否かはわからない。たとえ自分には不可能な仕事だとおもっていたにせよ、実際にやってみればそれが自分に最も適した仕事だということもある。

たとえそうでなくとも、自分には処理できぬ仕事をやれる人間がいる、と識れば、他者に対する感謝の心は生まれよう。

いずれにせよ人間は、自分に与えられた仕事を数多く経験することによって自己能力を厳しく鍛えあげ、どこに自分本来の個性＝潜在的自己能力があるのかを発見してゆく機会に恵まれてゆく。

しかも人間は、自分に与えられた仕事を通じて多くの人間と出逢い、自然的感情を豊かに培ってゆくことができる。

およそ人間は、他者との交わりのなかでこそ、何かを学び、何かを習得しうる。他者との意見や感情の交流は、これまで自分が識りえなかった知識や情報、発想の入手を可能ならしめる。そして他者からの批判や非難は、自分の短所の矯正に結びつくだけでなく、他者に対する心の痛みや他者をおもいやる心を培う最良の機会を与えるであろう。

「人生の事業というもの〔資本主義的企業〕は、国民の実際教育の主要な部分をなすものである。書物や学校教育も極めて必要かつ有益なことであるが、しかし右のような実際教育がそれに伴っていないときには、国民に実行の能力を与え、目的に適した手段を選択する能力を与えるに足りないのである」(Ⅲ p.942, ⑤298-299頁)。

もはやミルが目指した利己心の体系の構築は、スミスのな生産のための生産拡大政策では実現不可能であった。そこでミルは、人間的成長のための分配改善政策によってその構築を実現しようと考えた。まさしくそれは、スミスの政策からの方向転換を意味していた。

こうしてミルは、学説史的には、国富増進と富裕の全般化というスミスの目的をスミスとは異なる方法＝手段によって実現しうる、と考えた⁽²⁰⁾。

ミルの考えでは、明らかに人生には、幸福に辿り着くための一般法則が存在するのである。

たれしも人は、利己心を自由に発揮し、自らに定められた人生の目標にむかって積極的に自己努力を払ってゆけば、自分の仕事や人生上の経験、自分自身と一心同体になりうる他者や偉大なる大自然との出逢いを通じて感動の心を発見し、したがってまた公共心を育成することによって、おのずと人間愛の認識へと到達してゆくのである。まさしく愛こそは、人間の普遍的原理であり、たれしも人は、その人間愛の認識への到達によって無私の心を培い、すべての自己行為に対し見返りを求めぬ社会的存在となりうるのである。

「現在でさえたれもが、自分は社会的存在であるという根強い観念をもっており、その結果、自然な欲求の一つとして、自分の感情や目的は同胞の感情や目的と調和すべきものと感じる傾向にある。たとえ意見や精神の開発(教養)がちがうことから、同胞が実際に抱く感情の多くを共有できない——おそらくかれは同胞の感情を非難し拒否するだろう——にしても、かれはなお、真の目的に関しては自分と同胞のあいだに衝突はないこと、自分は同胞が本当に願っているもの、つまりかれら自身の善と対立しているのではなく、逆に人間的善を増進しているのだということを、意識していかなければならな

いのである⁽²¹⁾」。

おわりに

ミルによれば、人間には人生に目標がなければならない。人生の目標とは、自分が達成したいことである。それは一般に夢と呼ばれることもあるが、いずれにせよ人間には、常に人生の目標が必要である。

それはなぜかといえば、人間には個性があるからである。個性とは、簡単にいえば①自分個人の性格であり、同時にまた②自分個人の特性であり、③ひとえにそれは自分個人の特質である。

人間には、それぞれ性格がある。たとえばそれは、気が強いとか気が弱いという感情である。さらに人間には、それぞれ特性がある。たとえばそれは、足が速いとか遅いとか、舌が良いとか悪いとかいう各人特有の個性である。そしてそうした各人の性格や特性は、総じて各人に特有な性格であり、つまりはその人物自体の人間としての資質である。

たとえば気が強く足が速く運動神経が他者に比してずば抜けている人間は、プロの運動選手としての資質があるし、あるいはまた繊細な性格で舌の感性が他者に比して優れている人間は、料理人やソムリエになりうる資質がある、といえよう。そうした個性が当然、自己能力に他ならない。

人間には、たれにでもそうした個性＝自己能力がはじめから与えられている。

しかし意外にも、そうした自分自身の個性＝自己能力を発見し、自分の存在価値を高めてゆく者は実に数少ないのである。

それは一体なぜか、といえば人生の目標を発見することができないからである。

生来、自分に特有な個性＝自己能力が与えられているにもかかわらず、人生の目標を発見できなければ、その個性＝自己能力は高まってゆくことはない。否、それどころか人生の目標が発見できなければ、自らの個性＝自己能力は一生、使用されることはないのである。それは自分自身の生命を使用しないのと同じことである。なぜなら人間の生命とは、ひとえに個性＝自己能力であるからである。

その結果、実に多くの人間が道具としての人生を送ってしまうことになるのである。自らの人生の目標にむかって努力し、個性＝自己能力の向上によって自らの存在価値を高め、自らの生命を惜しみなく使う者は、人間的成長を遂げてゆく者である。しかし他方、人生に目標を見いだせない者は、自らの存在価値を発見しえない者であり、それゆえに他者の命令によって仕事を成すしか生きる道がない道具としての人生に転落してしまうことになるのである。

自らの人生に明確な目標を見定め、その達成にむかって努力する者こそ、真に自らの人生を生き抜く者といえるだろう。人の人生は、それでこそ積極的に生かされてゆく。

しかし人生の目標を発見するには、一体どうすればよいのか。この問題は、幸福な人生を構築できるか否かにとって決定的に重要な問題である。

ミルによれば、この問題に対する解答は、共感能力を高める、という一言に尽きる。

ひとえに共感能力とは、他者を見て何かを感じる力である。それゆえ共感能力とは、自然的感情の力である。人間の自然的感情は、一般に喜・怒・哀・楽を具体的に感じとれる力であるが、その感情によって自分がある特定の他者に「完全なる一体感」＝「完全なる共感」を見いだす力こそ、まさに共感能力なのである。

たとえば自分がある特定の他者を見て、自分もまたその人物と同じような人間になろう、同じような仕事をしよう、と感じられた時、自分の人生の目標は明確に定まるのである。

それゆえ人の人生の目標は、ある特定の他者への共感によって発見されるのであり、その発見は同時に自己の発見に他ならないのである。

たとえば自分がある有名な歴史作家を見て（あるいはその著作を読んで）、自分もその人物のようになろう、自分も歴史作家になろう、と共感しえた時、すでに自分は他者という存在を通じて自分自身の個性＝自己能力や自分自身の最初の使命を発見している、といえるのである。

そうして自ら定めた人生の目標にむかって努力し、利己心を発揮してゆけば、そのプロセスのなかで共感能力はますます高まり、それに伴って人生の目標は成就し、さらに高い目標を発見し、共感能力を高めてゆくであろう。

そうしてある特定の他者に「完全なる一体感」＝「完全なる共感」を見いだした時、人は自らの心に眠る感動を発見するのである。まさに感動とは、自己と他者との一体感であり、感動の心の発見は、これさえあれば他にはもう何もいらぬ、と想える自らの究極の使命の発見であり、幸福の絶対的価値の発見である。

たとえば自分がJ. S. ミルという人物に感動した時、それは自分がJ. S. ミルに「完全なる一体感」＝「完全なる共感」を覚えたということ、あるいは自分が石田三成という人物に感動した時、それは自分が石田三成に「完全なる一体感」＝「完全なる共感」を覚えたということであり、それこそまさに自らの人生における絶対的幸福の発見なのである。

逆にいえば、人生の目標にむかって利己心を発揮し、それを成就して、さらに高い目標にむかってゆくその時は、いまだ不完全なる共感の状態なのであり——現実にはそれを錯覚して自分では「完全なる一体感」＝「完全なる共感」によって明確な人生の目標を発見したと思い込んでいるのだが——つまりはその時、自分は相対的な幸福を発見し——たとえば他者

に比して相対的に地位が高いとか、お金があるとか——それゆえに相対的な幸福しか獲得していないのである。

そのかぎり人は、他者と比較したばあいの相対的な幸福しか手に入れることができず、人生の目的と手段とを転倒させた人生の価値観＝幸福の価値規準しか有していないのである。

しかし人の人生には、真の幸福＝感動の発見による絶対的幸福——自らの感動、ひいては自らの愛を自らの仕事を通じて世に施し、そうして意識的に社会に貢献してゆくことのなかにこそ人間の幸福はある、という自らの使命——が与えられているのである。

まさしく人は、自らの才能を存分に発揮し、それを社会や全世界の幸福のために使用しえてこそ、世に感動を与え、ひいては広く世に自らの愛を注いでゆけるのである。そしてそうした生き方は、すべての人間に個性＝自己能力、ひいては才能が与えられているかぎり、すべての人間に成しうる仕事なのである。

それゆえにこそミルは、政治経済学の使命は、人間の幸福とは何か、を明らかにし、それを達成する具体的な方法として企業の社会的使命と教育の役割の重要性を前面に押しだし、共感能力を向上せしめてこそ、人は自らの人生の目標にむかって利己心を発揮し、積極的に努力する人間の自然的状態に到達し、より高い目標を求めて生きる時、そのプロセスのなかで共感能力を高め、ついには自らの感動の心を発見し、公共心に満ちた人間として理想的な状態に到達し、真の幸福のなかで生きてゆくことができる、と主張しえたのである⁽²⁾。

ミルが『経済学原理』のなかで展開した人生の法則を識る時、われわれはいかに生きるべきか、という人生の指針と真の幸福とは何か、という人生の価値、そして最先進国のすすむべき方向とその内容についてうかがい識ることができるのである。

「一人は万民のために、万民は一人のために」というミルの人生論＝幸福論の視点が現代に生かされてゆけば、個人の幸福と共に社会の幸福は明らかに増してゆくにちがいないだろう。

注

- (1) J. S. ミル『経済学原理』からの引用に関しては、Mill [1] を使用した。たとえば (Ⅱ p.217, ②51頁) と表示したのは、左が Collected Works Ⅱ の217ページからの、右が岩波文庫の末永茂喜訳の第二分冊51頁からの引用を示している。引用文中の〔 〕は、私が補ったものである。
- (2) Mill [2] p.261, 訳280頁。
- (3) 私のミル研究の最大の主張点は、ミルの政治経済学体系は公共心の体系である、ということにある。公共心の体系とは、各人がお互いに自らの個性＝自己能力、ひいては自らの才能を意識的、自覚的に社会の一般的、全般的幸福＝社会全体の調和のために使用しあう社会システムのことである。ミルの表現を借りれば、公共心の体系とは、「人間愛と利害を度外視した献身とに満ちた社会」(Ⅲ p.760, ④116頁) 体系のことであり、ひとえにそれは人間愛の体系である、と表現することができる。それゆえ実は、公共心の体系とは人間愛の体系に他ならないのである。事実ミルは、『経済学原理』のみならず、他の幾多の著書のな

- かでも人間愛の重要性を指摘している。たとえばミル [3] では、すべての人間の心には本来、「他人の善のためならば自分の最大の善をも犠牲にする」という「利他心」＝公共心が宿っている、と主張している (p.216, 訳475頁)。まさにそれは、人間が本来、愛そのものであり、善なる存在であるからに他ならない (p.233, 訳495-496頁)。
- (4) Mill [1] では、「愛」とは「利害を度外視した献身」、つまり無償の奉仕である、と表現しているが、Mill [2] では、「愛」とは「お互いに許しあうこと」 (p.226, 訳228頁) と表現している。ミルは、各人がお互いに人間愛を培うことによって「さまざまな人間がさまざまな生き方を許される」 ([2] p.266, 訳288頁) 社会のなかでこそ、各人は自らの個性＝自己能力、ひいては自分本来の個性＝潜在的自己能力、つまりは才能を存分に発揮し、社会に貢献しうる存在となる、と考えたのである。以上の点を考慮すると、ミルにおける「愛」とは、①「お互いに許しあうこと」＝お互いの存在を受け入れあうこと、②「利害を度外視した献身」、つまり他者や社会への無償の奉仕という意味であることがわかる。
- (5) Mill [3] p.218, 訳478頁。
- (6) Mill [1] では、最高度の人間の生き方は「人生の美点美質」 (Ⅲ p.755, ④107頁) を追求する生き方である、と主張されているが、明らかに「人生の美点美質」とは人生の感動を意味している。ミルは、人間は自己と他者との「完全なる一体感」 ([3] p.232, 訳494頁)、いいかえれば「完全なる共感」 ([3] p.233, 訳495頁) を得た時にこそ、人生における最高の喜びを得ることができるのであり、それゆえに人間はある特定の他者に「完全なる一体感」＝「完全なる共感」を得た時、自らの感動の心を発見し、同時にまた「同胞との一体感」 ([3] p.228, 訳488頁) を得て、「利害を度外視した献身」に満ちた愛の心を発見し、「人生の美点美質」を追求する生き方を貫いてゆける、と考えたのである。
- (7) Mill [3] p.232, 訳494頁
- (8) Mill [3] p.233, 訳495頁
- (9) Mill [3] p.232, 訳494頁
- (10) Mill [3] p.213, 訳472頁
- (11) Mill [3] p.218, 訳478頁
- (12) ミルの究極の理想的市民社会は、『経済学原理』第4編第6章におけるゾルレンとしての「停止状態」論のなかで展開される。具体的にはそれは、各人が自らの心に映じた感動を、ひいては愛を、自らの仕事を通じて広く社会に伝える、という人生の目的＝人間の使命を達成してゆく生き方を互いに許される社会のことに他ならない。
- (13) Mill [2] p.266, 訳288-289頁
- (14) Mill [2] p.263, 訳282頁
- (15) Mill [3] p.216, 訳475頁
- (16) Mill [3] p.253, 訳516頁
- (17) Mill [3] p.253, 訳516頁
- (18) Mill [2] p.279, 訳305頁
- (19) Mill [2] p.263, 訳283-284頁
- (20) ミルの経済政策の二大支柱は、資本蓄積と分配改善の実現であったが、かれの主眼が後者に置かれていることはいうべくもない。ミルにとって、「時代の二大要請」は、「分配の改善と労働に対する報酬の増加」 (Ⅲ p.758, ④112頁) の実現ということであった。ミルは、スミスにおける市民的要請としての資本蓄積の増大が、さまざまな経済的・政治的弊害を生みだしたことを明確に自覚していた。たとえばミルは、つぎのように述べている。「産業的進歩」に伴う「富の総額の一大増加」によって、「貧しい人たちのうちの多くの人たちも富裕となり、中産諸階級はその数と力とを増してきて、余裕ある生活のための手段がますます広く普及するが、その一方、社会全体の底部にある多数の人から成る階級は、ただその数を増すだけであって、生活程度も教養も改善されるところがない」 (Ⅲ p.709, ④16頁) と。こうした自覚のゆえに、社会制度の改良と教育の普及・人口制限が行われるならば、「現在の社会制度のもとでさえ貧困は消滅するだろう」 (Ⅱ p.208, ②30頁) という主張を前面に押し出すことになる。またスミスは [7] のみならず、[8] においても全般にわたり、資本蓄積論の重要性を指摘している点に留意せよ。この点に関しては、高

島〔11〕〔12〕がスミスの道徳的世界と生産力の体系とを結びつけた鋭い考察を行なっている。

(21) Mill〔3〕p.233, 訳495-496頁

(22) ミル政治経済学の偉大さは、人間本性 (human nature) に基礎づけて経済・社会システムの進歩を重層的に捉えた点にあるが、ミルの「人間的成長」と「経済的進歩」という概念と株式会社 (企業) における教育の重要性については、ミルの弟子・マーシャル (Alfred Marshall, 1842-1924) において明確に継承されている。ミルは企業教育による労働者の「人間的成長」によって、社会的共感の質が向上し、「道徳革命」が実現される必要性を説いた。一方、マーシャルもこうしたミルの立場を継承し「人間的進歩」による「経済的進歩」との相互展開を主張している。マーシャル経済学における進歩思想について詳しくは、岩下〔9〕を参照。なおミルの自然概念については、ミル〔5〕「自然論 (Nature)」を参照。人間の自然＝人間本性の解明に基づいて人間学 (Science of Man) の全貌をはじめて明らかにしたのは、D・ヒュームであるが、ヒュームは〔6〕第三篇で、人間には「私的仁愛 (private benevolence)」の他に、「人類の利害への顧慮 (a regard to the interests of the party concerned)」としての「公共的仁愛 (public benevolence)」があることを指摘した。しかしヒュームは、人間は「自己利益への関心 (self-interest)」を第一とし、仁愛などの自然的徳にも限界があることから、「共感感情 sympathy」と人間の努力による情念の抑制の重要性を説いている。ヒューム社会科学については、道徳論と西洋における自然概念の変遷との関連で詳細に考察された古賀〔10〕を参照のこと。

参考文献

- 〔1〕 Mill, J. S., *Principles of Economy*, with some of their applications to social philosophy, 1848, in *Collected Works of John Stuart Mill*, Vol.I-XXI, ed. by Routledge & K. Paul, 1965-74 (末永茂喜訳『経済学原理』岩波文庫, 第1-5分冊, 1959-63年)
- 〔2〕 Mill, J. S., *On Liberty*, 1859, in *Collected Works*, Vol.XIV, 1977 (早坂忠訳『自由論』中央公論社, 1967年)
- 〔3〕 Mill, J. S., *Utilitarianism*, 1861, in *Collected Works*, Vol.X, 1969 (伊原吉之助訳『功利主義論』中央公論社, 1967年)
- 〔4〕 Mill, J. S., *Considerations on Representative Government*, 1861, ed. by Harper & Brothers, New York Univ. Press, 1862 (山下重一訳『代議政治論』中央公論社, 1967年)
- 〔5〕 Mill, J. S., *Three Essays on Religion*, 1874, in *Collected Works of John Stuart Mill*, Routledge & Kegan Paul, 1969., Vol.X.
- 〔6〕 Hume, D., *A Treatise of Human Nature*, 1739-40, ed. by L. A. Selby-Bigge. Oxford: Oxford University Press, 1978 (大槻春彦訳『人性論』岩波文庫)
- 〔7〕 Smith, A., *The Theory of Moral Sentiments*, 1759, ed. by D. Raphael and A. Macfie, Oxford, 1976. (米森富男訳『道徳情操論』未来社, 1969年)
- 〔8〕 Smith, A., *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*, 1776, 2 Vols., ed. by E. Cannan, London, 1950. (大内兵衛・松川七郎訳『諸国民の富』全5冊, 岩波文庫, 1975年)
- 〔9〕 岩下伸朗「マーシャル経済学の進歩思想—進化論的経済学の方法—」(小柳公洋編『イギリス経済思想史』ナカニシヤ出版, 2004年所収)
- 〔10〕 古賀勝次郎『ヒューム社会科学の基礎』行人社, 1999年
- 〔11〕 高島善哉『アダム・スミス』岩波新書, 1968年
- 〔12〕 高島善哉『アダム・スミスの市民社会体系』岩波書店, 1976年

付記 本論文は前原直子氏との共同研究の成果である。